

「イエス・キリスト」

京都山科の「からしだね館」の書店に行って、そこでカール・バルトの「一日一章」という本を見つけた。あまり長いのは難しいけれど、一日に一章くらいなら読めるかもしれないと思って購入。

1 月 1 日「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって・・・」創世記 1:1-2
人に向けられた神の意志と成就是一ほかの何事でもなく！一すべての事物の始まりにあります。

分からないなあ～と思いながら読み進め、ところがだんだん真に迫ってきて、3 月末の「イエスのご受難の前にある人間」あたりからは、どう表現すればいいのだろう・・・、アッと驚くというか、気が遠くなるというか、私は「神さま、神さま」と言いながら、いったい何を思っていたのだろうと、私の思いをはるかに超えるイエスが立ち現れてくるかのようになった。

4 月 5 日「神はわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」コロサイ:14

(証書をもって) 私たちを告発で苦しめるのは神です。けれども決して神ご自身ではなく、むしろ私たちが持ち続けてきた神への間違った記憶であるに過ぎません。

私たちは、神ご自身と、神への間違った記憶とを混同してはならないのだ。

イエスは何をなさったのでしょうか。イエスは、忘れられ誤解された「神の考え」を再び明るみに出されました。・・・イエスにとって神は見知らぬ方ではなく、最も自然で最も熟知している方でした。・・・イエスは神を逆さまの鏡では見ず、顔と顔とを合わせて見

ていました。イエスにとって神はだから恐ろしいものではなく、喜びでした。善行は強制ではなく、自由でした。愛はねばならぬことではなく、許可、意志、行為でした。

救い主の生涯において、神の本来の隠された本質が何と素晴らしく完全に明るみに出たことでしょう。つまり、生きている神、一切の悪を放棄させ一切の善を自ら成長させるために、教会も、学校も、警察も、党も、役所も必要としない神です。強い神、必死の努力と闘いを必要とせず、ただ一言仰せになるだけで、罪の縄目、金銀の宮殿、病気の城、それどころか死の一味は陥落します。愛そのものであられる神、特別な愛の言葉を言ったり行ったりする必要はなく、純粹に愛することだけが神から私に、私たちに、世界の中に入ってくるのです。

見よ、この方こそイエスでした。

今日、桐ヶ丘集会でマタイ 14:22-33 を読んだが、「夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた」と、湖の上を歩かれるイエスさまに、「一切の悪を放棄させ一切の善を自ら成長させるために、教会も、学校も、警察も・・・必要としない神」が重なった。

イエスさまから目を離し沈みかけると、やはり教会も、学校もなければ伝道はできないと思ってしまう。イエスさまが伝わらないのは、教会がないからでも、学校がないからでもなく、私に都合の良いイエスさまはいても、愛そのものであられる神(イエス)がおられないからだ気づく。

(愛そのものであられる神、この地上に生きている人間イエス)

人間のすべての罪と困窮をイエスはご自分の体で体験され、死をも最後には引き受けられ、そのようにすべてにおいて神とは無縁の私たちの大きな世界にすっかり入ってこられました。そしてあの最悪のこともイエスはご自身で体験されました。

(神を理解せず)、イエスを見捨てて十字架にかけた人々、それは私たちが戦争とあらゆる悪の責任を負わせたいと思う「罪人たち」、支配者たち、享楽主義者たち、金持ちだけではなく、むしろこのような敬虔で熱心な、改心し、神に対して熱心で、悪と闘う告発者たち、私たちの間でなら他ならぬ「最善の人びと」であろうとする人びとなのであります。・・・

しかし(イエスは)一瞬たりとも、槍で人びとに対して反撃なさらなかった、私たちならすぐにそうするでしょうに！ イエスは罵られたのに、罵ることはなさらなかった、私たちならそうするし、そうせずにはいないでしょう—神は私たちにとってそれほど異質だからです。

「神は私たちにとってそれほど異質だからです」

天の国の祝宴に「すっかり用意ができています。さあおいでください」と、善人も悪人も見かけた人はみな集めて来て、祝宴の席をいっぱいになさる神さま。マタイ 22:1-13
そこで追い出されたのは、用意された礼服(キリストの救い)が必要でないと思えるほど、正しく生きたはずの人たちだった。

イエスは・・・(人びとの)不信心の責任を問わず、非難せず、大きな慈しみで理解されました。父よ、彼らを赦してください。彼らは自分のしていることがわからないからです。

実に人びとによってこそ生じた恐ろしい苦境を、人びとに対する告発として向けられず、すべての人びとの名において、イエスの敵の名においても懇願と叫びとして神にむけられました。「わが神、わが神、なにゆえあなたはわたしをお見捨てになったのですか」

読み進めると、「神の国はあなたたちのところに来ている」マタイ 12:28 イエスさまの言われる「新しい、生きて働く神の国」がこの悲惨と破壊の只中に創られているのが分か

ってくる。

野の花も、大空も、小鳥たちも喜び祝う復活の春。

耳を傾けて一心に聴こう！ イエスは言われた。「私は復活であり、命である」

イエスの復活と命は私たちためにある、と造られたもの全てが神の愛を讃えて歌っている。